

共同研究【若手】● ランドスケープの人類学的研究—視覚化と身体化の視点から（2012-2014）

本プロジェクトは今年で最終年度となる。共同研究員およびゲストスピーカーによる発表はすでに12回におよび、毎回、総合討論の時間を長めに設定することで、景観人類学の理論的な射程について議論してきた。日本では景観人類学を主題とする著作や論文がまだ限られており、この分野は萌芽的な段階にある。それゆえ、本プロジェクトを始める以前、各共同研究員が考える景観人類学の方向性は一律でなく、景観の定義ひとつをとっても一致してはいなかった。しかし、発表と議論の回数を重ねるごとに、各自の研究を包括する視点や枠組みが、共有されていった。また、本研究では、さらに景観人類学において検討が必要な五感と応用実践の問題についても議論した。以下、景観の定義、五感の扱い、応用実践の可能性の3点について、先行研究を踏まえながら、本研究の中間的な総括と展望をおこなうことにしたい。

「景観」の再考

景観人類学は、日本でこそ萌芽的な段階にあるが、イギリスやアメリカを始めとする英語圏の人類学界では、すでに多くの論者が提示されている。本研究は、そのうちの認識論的なアプローチに焦点を当て、各共同研究員の研究や問題関心から、それを再検討してきた。

認識論的なアプローチは主に外的景観と内的景観という2つの異なる景観に注目する。前者は、都市計画や観光パンフレットでしばしば描かれる、外部者がその土地の特色として思い描く景観である。逆に後者は、地域住民などが日々の生活でつねにかかわり、普段は何気なく接しているが（とくに外的な刺激を与えられた時に）自らの重要な「原風景」として思い描くことのある景観である。先行研究では、外的景観と内的景観もしくは内的景観同士の競合について論じられてきたが、本研究では、異なる景観が競合するだけでなく、調整しうる可能性も導き出すことができた。

他方で、本研究では、人々の身体実践と景観変化の連関性に、よりいっそう着目するアプローチも提示された。ここでいう景観は、上記の認識論的なアプローチと異なり、自然や建築など物的存在そのものである。あるいは人々の身体実践が埋め込まれた「受け皿」として景観が捉えられることもある。



香港の龍舞とその音風景（2011年、辻本香子撮影）。

このアプローチでは、人々の生態へのかかわりや政策的影響などが景観をつくりあげ、さらに景観が時間の経過とともに変化していくプロセスを探求する。また、景観の配置やデザインが物的なエージェンシーとして人々の行為や思考に働きかける力学も研究の対象となる。

認識論アプローチでは、人々の主観的な認識としての景観に重点が置かれる傾向が強かった。しかし、より包括的な枠組みから捉えるならば、景観人類学でいう「景観」は、認識だけでなく行為も埋め込まれた物的存在であると、広義に定義しなおした方がよさそうである。

景観人類学における五感の扱い

景観というと五感のうちとくに視覚と関係するため、景観人類学では視覚に着目する傾向が強い。しかし、ある景観を想起したり形成したりする際には、聴覚が関連することもある。本研究では、聴覚と景観の問題、具体的にはサウンドスケープといわれる領域についても議論を展開した。

もちろん、景観人類学において聴覚がまったく取りあげられてこなかったわけではない。たとえば、スティーブン・フェルド（Feld 1997）らは、歌が内的景観をつくりだす媒体になっていると指摘している。視覚と聴覚は分けて考えることができない。人々は、歌、音楽、それにとどまらない環境音を聞くことで、かつて体験した「原風景」を視覚的に想起することができるからである。他方で、本研究では、音が外的景観をつくりだす可能性があることも指摘された。つまり、政府や企業などがある歴史的景観を再生する時、その地域で馴染みがあった懐かしい音（時計台、下駄、祭りの音など）を取り入れることで、昔の特徴ある景観を思い起こさせる工夫をなすことがある。これらの音は、外的景観として観光や

地域開発に活かされ、収入を得る道具ともなりうる。だが、外的景観として創出された音は、しばしば利益につながるようなものだけが選ばれるため、地域住民が想定する内的景観の音と齟齬をきたすこともある。

景観はさらに、聴覚だけでなく、嗅覚、触覚、味覚など他の五感とも関連しうる。一例を挙げると、ある匂いをかぐことで、幼少期の記憶にある巷や小屋の景観が思い浮かべら

れ、それが懐古的な動きと相俟って再建されるという可能性もある。現在、景観人類学では、視覚から議論を展開する研究が主流であり、聴覚については多少の研究があるが、嗅覚、触覚、味覚についてはほとんど研究がない。こうした視覚以外の五感についても研究していくことが、今後の課題となる。

景観人類学における応用実践の可能性

景観をテーマとすると、景観問題をどのように解決するのか、どのように景観をデザインするのか、などといった応用実践の問題が無視できなくなるが、景観

人類学ではそこまで展開しない研究が大半を占める。このことは人類学という学問自体の性質と無関係ではない。人類学者のなかには、研究者は中立であり、現地の社会問題にむやみに干渉すべきではないとする立場を採る者もいるからである。

ただし、近年の人類学では、人類学者が中立であるということはあるにないため、現地の社会問題や関心事に貢献すべきという意見もある。景観人類学でも、応用実践の問題にまで言及する研究がすでにいくつかある。そのうちもっとも顕著なのは、内的景観の重要性と保護を唱える研究である。たとえばスチュワートとストラザーンは、パプアニューギニアで巨大な石油汲上げ機が設置された時、現地のドゥナ人から大きな反発を受けたが、それは人間が死ぬと土地の油になり子孫に豊穡を与えるという彼らの世界観と密接にかかわっていることに注目する。そして、この事例から、内的景観の理解こそが開発問題の解決につながると提案している (Stewart and Strathern 2005)。本研究でも、インドを事例に同様の見解が提示された。インドのタール沙漠では、風力発電に必要な風車 (風力タービン) が設置されたが、現地で聖地とみなされる場所と重なったため、問題が生じた。つまり、風車の設置は、外部者の利益にはなっていたが、彼らが住民の信仰と関連する内的景観を考慮しなかったため葛藤が起きたのである。内的景観を理解することで開発のトラブルを減少させる可能性を探求することは、景観人類学のひとつの論点となっている。

他方で、本研究では、景観を保護するため、研究者が主導して現地住民の関心を喚起する事例が提起され、議論が展開された。具体的には、外部の研究者がある遺産を保存する価値があると評価した後、現地の学識者と協議し、現地の人々の協力を得ながら、その遺産を保護するというものである。その際、現地で重要と考えられる景観をマッピングし、データベース化していく手法も提示された。この手法は、パブリック考古学の視点と類似したものであり (松田・岡村



インド・タール沙漠の聖地 Badabagh と林立する風力タービン (2014年、小西公大撮影)。

2012)、景観人類学が景観問題や遺産保護に取り組むうへでも参考になる。ただし、景観人類学でいう内的景観は、ひとつの共同体内であっても多様性ははらむものであり、往々にして生活者が言葉として語れない感覚的なものでもある。そのため、外部の研究者が現地の一部の有識者との話し合いで本当に内的景観を理解できるのかは疑問であるし、よしんば理解できたとしても、マッピングすることで政治経済的に利用され、外的景観へと転換される可能性も否めない。

景観人類学では、現地の人々と協力し、現地主体で景観問題に取り組むパブリック考古学／人類学の方向性をより考えていかねばならないかもしれない。しかし、現時点では、外的景観と内的景観の競合や調整を丹念に記述していく民族誌的作業を通して、材料を提示し、応用実践への可能性を広げていくことから始めねばならない。

【参考文献】

- Feld, S. 1997. Waterfalls of Song: An Acoustemology of Place Resounding in Bosavi, Papua New Guinea. In S. Feld and K. H. Basso (eds.) *Senses of Place*, pp.91-136. Santa Fe, New Mexico: School of American Research Advanced Seminar Series.
- 河合洋尚 2013 「景観人類学：認知とマテリアリティのはざま」『民博通信』143: 22-23.
- 松田陽・岡村勝行 2012 『パブリックアーケオロジー入門』同成社。
- Stewart, P. J. and A. J. Strathern 2005. Cosmology, Resources and Landscape: Agencies of the Dead and the Living in Duna, Papua New Guinea. *Ethnology* 44 (1): 35-47.

かわい ひろなお

国立民族学博物館研究戦略センター助教。専門は社会人類学、都市人類学、景観人類学。漢族地域における都市景観およびエスニシティ空間の人類学的研究をしている。著書に『景観人類学の課題—中国広州における都市環境の表象と再生』(風響社 2013年)、論文に“Creating Multiculturalism among the Han Chinese: Production of Cultural Landscape in Urban Guangzhou”. *Asia Pacific World* (International Association for Asia Pacific Studies, 2012) など。